

3) ホンモロコの産卵水域と産卵条件

孝橋賢一・井嶋重尾

【背景】近年、藻玉によるホンモロコ卵の特別採捕量が年々減少しているが、その要因として産卵生態の変化が考えられる。

【目的】ホンモロコの産卵水域、産卵条件等を再確認し、資源維持増殖対策に資する。

- 【成果概要】
1. 従来からホンモロコの主要な産卵場であると考えられている琵琶湖の抽水植物群落や湖岸の柳、それに加えてエリの垣網部分の表層と底層の二層および河川河口部に、1m 枠の人工産卵基体を設置した。調査は'95年2月27日から8月10日まで行い、原則として5日毎に産着卵の有無を確認した。産着卵の見られた人工産卵基体を持ち帰り、産着卵をふ化させて、ふ化仔魚数、魚種を調べた。
 2. '95年におけるホンモロコの産卵は4月7日から7月10日に確認され、産卵盛期は4月下旬から5月中旬であった（図1）。
 3. ホンモロコの産着卵数は同一水域でも環境条件により異なった。フナ・コイの産卵が多い抽水植物群落の最奥部では産卵が全くみられず、それに対してエリの垣網部分、柳の根部分、河口部、浮産卵床など比較的波浪の影響を受けやすい地点で多くの産卵が見られた。
 4. エリの垣網に設置した人工産卵基体におけるホンモロコの産着卵量の比率は、産卵期の前半（4月7日～5月30日）には表層27.9%：底層72.1%だったものが、後半（6月6日～7月10日）には表層93.1%：底層6.9%となった。この結果からホンモロコの産卵は底層から始まり、徐々に表層に移っていくことがわかれた（図2）。
 5. 沿湖9ヵ所にある浮産卵床において、ホンモロコの産卵水域を把握するために、上と同様な調査を行い、水域毎のホンモロコの産卵水域としての評価を行った。
 6. その結果、ホンモロコの産着卵は比叡辻、衣川、北山田、中主、牧、小野の各地先では見られたが、湖の北部にある新旭、湖北地先では確認できなかった（図3）。

【成果の活用】今後、沿整事業において、ホンモロコを対象とした増殖場を整備するうえで、場所、位置、構造等を検討する資料として活用する。

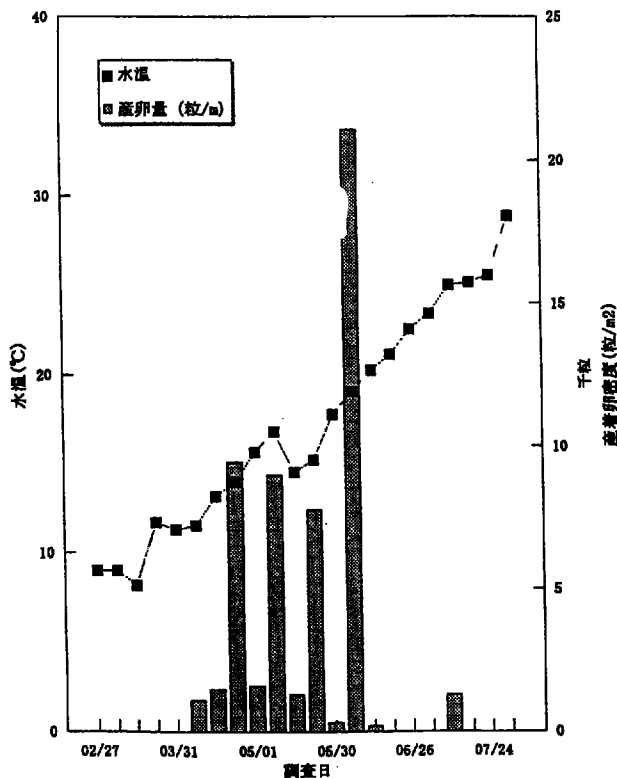


図1 '95年ホンモロコの産卵量の推移

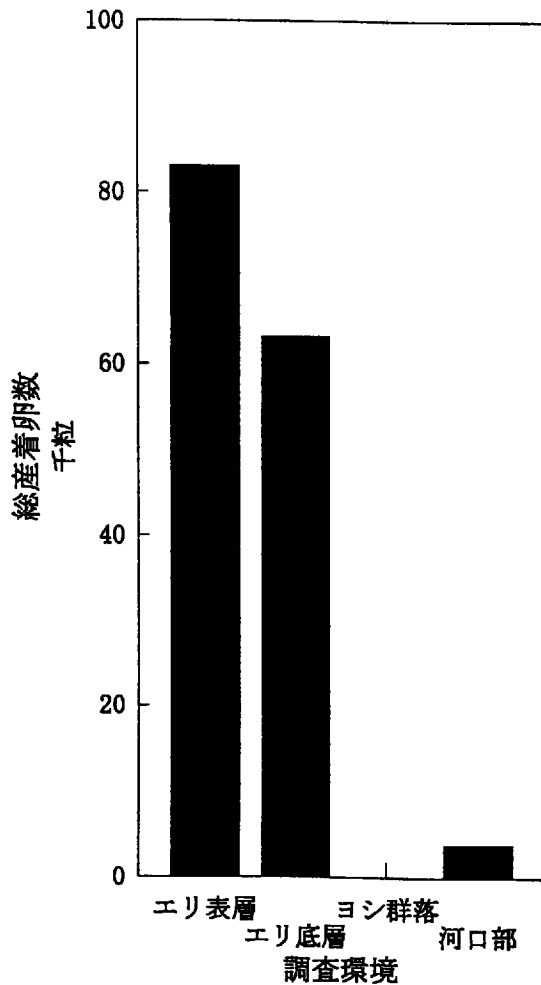


図2 環境による産着卵数の違い

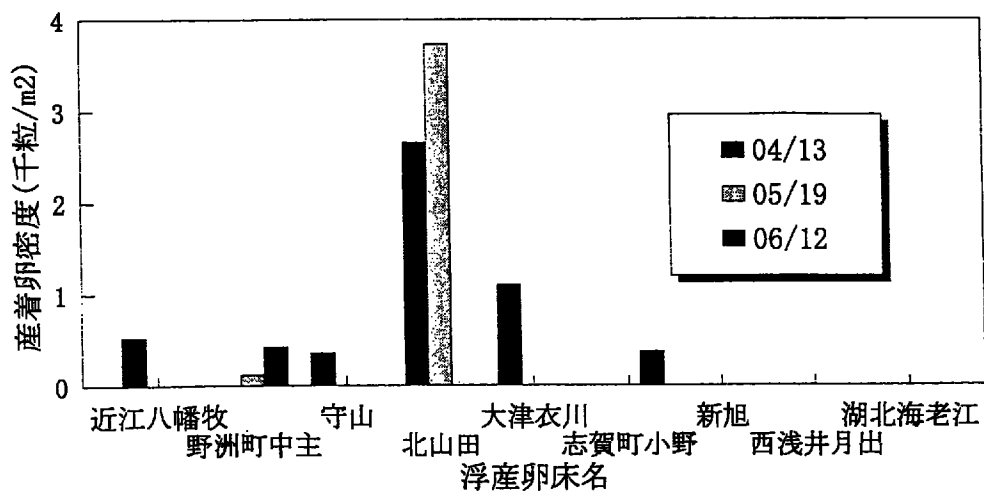


図3 95年全湖浮産卵床におけるホンモロコの産着卵密度